

## アダム・スミスの言語論

松原慶子

今日、経済学の祖として高名なアダム・スミスであるが、『諸国民の富』、『道徳感情論』に加えて、「法と統治の歴史と理論」、『文学・哲学・詩・雄弁のさまざまな部門の全ての哲学的歴史』とでもいうような大作2編の執筆計画を抱えていた。まさに知の巨人であったが、スミスのこの計画は未完に終わり歴大な手稿は殆ど焼却された。しかし、後者の計画を取り上げてみると、関連して残されたあるいは焼却をまぬがれた論文や受講生の講義ノートから、スミスの人文科学への高い関心と造詣、特に言語へのそれがみてとれる。そこで、拙論では、人間精神の諸能力の発達と言語の関係、その関係の変化、言語と社会との関連といったことを残された資料の中に探してみたい。といっても、スミスが明確に意識して一貫した書き物を残しているわけではないので、おおよその道筋をつける試みである<sup>(1)</sup>。

### 1. 「外部感覚について」

まず、最初に「外部感覚について」と題された試論を取り上げる。この論文は、言語と人間の関連にあまり関係がないように思われる。しかし、視・聴・臭・味・触覚という5感を通じた人間の外界の認識の発展が、言語を創造してゆく過程の人間精神の発達の導入部になると考えられる。又、視覚の対象としての自然の言語と人間の言語との対比には言語に関わる基本的な問題が含まれていると考えられるので、検討

してみたい。

通説では、スミスのこの論文の内容には新味は無いとされているが、スミス自身が述べているように、「通常列挙されているのは逆の順序で」5感を取り上げていることが重要であろう。彼はまず触覚を取りあげ、その理由として、触覚だけは身体のどの特定の器官にも限定されずに殆どあらゆる部分に分散していること、触覚の欠落した人間は存在しないであろうことを挙げる。そして、触覚の諸対象は、それらを知覚する身体の特長部分を圧迫するもの、もしくはそれに抵抗するものとして現われると言う。我々はこの圧迫し抵抗する事物を、我々の知覚する身体から独立した外部的なものと感じる。このように、スミスは触覚によって我々は自身と外界の事物との区別を知るとしている。感覚的認識における認識主体の機能も認めているが、これは、“私”の認識の出発点になろう。触覚の対象は固性(solidity、個性的実体(solid substance)とも表現)であり、また固性にとって本質的で分離不可能とみなされるその諸形態(第1性質)、つまり固性をもった延長、形、可分割性、可動性としている。

スミスは続いて、固性の第2性質、味覚、臭覚、聴覚、視覚と論じていくが、それにつれて感覚対象の固体性が希薄になっていく。そして、直接接触から間接的に空間的隔たりも順次大きくなってゆく。これは、人間の外界の知覚が直接から間接へ、物質から非物質へ、至近から遠隔へと進んでゆくことを示していると言え

よう。そしてその延長線上に、個別から普遍へ、具体から抽象へ、自然的総合的から形而上的分析的へという人間の認識能力の発達があり、それに対応する言語の発達があるのではないかと思われる。これが、「外部感覚について」において注目すべき第1点である。

スミスは、続いて固性の第2性質である熱さと冷たさ、味覚、臭覚、聴覚の対象へと議論を進めていく。それらの対象は、触覚に固有の対象とはまったく異なる種類の、知覚する器官のなかにあるものとしての感覚作用 (sensation) として感じられると言う。しかし、我々の経験の頻度と斉一性によって、また、それらが引き起こす思考の習慣と習癖によって、内部的感覚作用と、その感覚作用を引き起こす外部的原因とが、我々の概念のなかで密接に結び付けられるようになる」と述べる。

ここで問題としたいのは、「このテーブルは冷たい」という表現にみられるように、同一の言葉が、我々の感覚作用と、その感覚作用を引き起こす (テーブルの) 力能をともに意味するように用いられているというスミスの指摘である。彼はその原因を人間の作り上げた言語の曖昧さに帰している。この曖昧さは感覚対象の固体性が薄れるにつれて増していくということは、注目すべき点であるように思われる。スミスは表示するもの (言葉) と表示される対象との関係に常に関心を払っていた。ここでは、その関係が曖昧になっているのである。人間の言語のこの不完全さは、視覚について述べ進んでいくなかで、より明らかになる。

スミスの視覚についての考察は、彼自身が述べているように、バークリーの『視覚新論』が下敷きとなっている。スミスは、視覚の対象は色彩 (colour) であり、また色彩にとって本質的で分離不可能とみなされるその諸形態、つまり色彩をもった延長、形、可分割性、および可動性だと言う。可視的对象である色彩とその諸

形態と、可触的对象である固性とその諸形態とは2つの世界を構成し、なんら類似性をもたない。しかし、たとえばある可触的球体を表示する色彩の配合は、可触的立方体を表示するには適さないというように、2つの感覚の諸対象 (たとえば可触的球体と可視的円形) は互いに最も重要な対応と関連を示している。従って、同一名称で呼ばれるのである。

スミスはバークリー同様に、視覚の対象は自然の創造者が我々の目に語りかける一種の言語を構成していると言う。さらに、この自然の言語は、それが表示する可触的对象と親和性、対応関係を持つがゆえに、人間の作り上げた言語より優れていると言う。人間の言語がある可触的对象を球体と呼ぶのは、人間の恣意的行為の結果であり、習慣によって定着しただけのことである。物体としての球体と言葉としての球体にはなんら親和性も対応関係も無いというわけである。

The language which nature addresses to our eyes, has evidently a fitness of representation, an aptitude for signifying the precise things which it denotes, much superior to that of any of the artificial languages which human art and ingenuity have ever been to invent.<sup>(2)</sup>

この言語観の根底にはすでに、言葉とそれが表示する対象との対応関係を重視する思想がある。「外部感覚について」において、2番目に注目したいのは、まさにこの点である。固性の第2性質や味・臭・聴覚の対象を表す言葉の曖昧さの指摘も、言葉とそれが表示する対象がうまく対応していないからなのである。そして、この言語観は、次に検討する「言語起源論」へ引き継がれていく。

## 2. 「言語起源論」<sup>(3)</sup>

ヨーロッパの17, 8世紀は言語への関心が強く、言語をめぐる問題、たとえば言語の起源、言語の成立と社会のそれとの関係などは、ルソーやデイドロ、コンディアックなどにとっても思索の重要課題であった。また、言葉とそれが表示する対象との関係、とりわけ両者のズレへの危機感は深刻であった。言語アカデミー構想やスイフトの『ガリヴァー旅行記』の第3話における物々表現の方法、チェンバーズのEncyclopaedia (1728年)における物の重視の強調と、そのための図版の多用などにみられる通りである。

スミスの「言語起源論」もこのような流れのなかで執筆されているが、結論を先取りするならば、次のような特徴がある。

1. 言葉（指すもの）とそれが表示する対象（指されるもの）との関係への関心をもとに、言語構造と自然界の構造に対応関係をみいだしている。つまり、自然界は物（objects）と事（facts, events）から成り立っており、物を対象にするのは名詞、事を対象にするのは動詞ということになる。
2. 言語の発展、スミスにとっては諸品詞の生成発展は、人間精神の諸能力の発展に依存している。自然界に基礎をおく品詞から、精神の抽象能力を必要とする品詞の生成へと過程をふんでいくわけである。
3. スミスは、経済学者道徳主義者としてなんらかの社会を想定しており、そこにおける人間の本性、物事の自然な進行を前提にしている。したがって、自然に（naturally）知らず知らずに（unconsciously）という語が頻出する。

今少し詳細にみていくと、彼は「言語起源論」の冒頭で、最初に形成されたのは実体名詞<sup>(4)</sup>だと推論している。

The assignation of particular names, to denote particular objects, that is, the institution of nouns substantive, would probably be one of the first steps towards the formation of language. Two savages, who had never been taught to speak, but had been bred up remote from the societies of men, would naturally begin to form that language by which they would endeavour to make their mutual wants intelligible to each other, by uttering certain sounds, whenever they meant to denote certain objects. Those objects only which were most familiar to them, and which they had most frequent occasion to mention, would have particular names assigned to them.<sup>(5)</sup>

2人の未開人が相互に要求を伝えあう時、その対象をいつも一定の音を発して伝えたのが言語形成の第一歩、固有名詞の形成である。言語形成の第一歩は外界認識の第一歩でもあり、その固有名詞とは最も生活に身近な特定の洞穴なり木、泉を指していた。この段階では言葉とその表示する対象は一対一で対応している。

後になって、未開人の経験が拡大し、他の新しい洞穴や木、泉を観察した時、それらが古い対象と類似性をもつことから、古い対象の名称を記憶から想起して、同一の名称を与えたであろう。このようにして普通名詞が誕生する。この過程における一般化という精神作用は、スミスによれば、一つの対象に対してそれに類似したもう一つの対象の名を与え、もとは個体を表現するつもりであったものによって多数を示すという人間によくある性向にすぎない。

かくて、多くの物が一般的名称のもとに類別、種別されたが、その一般的名称で括られた物のなかで、ある特定の物を他の物と区別する必要が生じた時にはどうするか。その特定の物の特別な性質か、その物と他の物との関係によって、

区別せざるをえなくなる。こうして、性質を表示するものとして形容詞が、関係を表示するものとして前置詞が形成されることになる。性質とは、殆ど常に我々の外的諸感覚の対象であるが、関係はそうではない。したがって、関係を表示する前置詞はより多くの抽象と一般化の努力が必要になり、形容詞の形成が先行する。

しかし、形容詞の中でも最も具体的であるはずの色彩の名称を発明した人びとでさえ、非常に多くの対象を観察し比較し、その類似と相違に注意し、心の中でさまざまな類別と種別に配列したに違いない。かなりの程度の抽象と一般化が必要なのである。たとえば最初に緑色の (green) という語を考え出した人間は、木からその木の葉の緑色を区別して抽出し別の名称を与えて独自に使用し、木は緑という性質が無くとも存在しうると考える。これは比較、抽象、一般化などの精神の諸能力を必要とするのはいうまでもないが、同時に人間が自然界を自然にあるがままに総合的に捕らえていた段階から、形而上学的<sup>6)</sup>に分析的に認識していく段階に入ったことをも意味する。自然界と人間との距離が遠ざかっていくとも考えられる。

このように、実体とその性質の分離といった抽象を必要とする形容詞の発明以前に、より自然に性質を表わす方法が案出されている。名詞自体にそれが備えている性質に応じて変化を与えるのである。こうして、多くの言語において男性、女性、無性が名詞の語尾変化によって表示された。つまり、自然界において (in nature) 雌雄などの性質は、当然実体の形態変化として表われる。言葉においても (in language) その変化が名詞の変化となって表現される。この方法では依然として自然界の構造と言語の構造が対応していると言える。

名詞の変化が諸性質の多様性に応じられなくなった時、形容詞が発明されるが、形容する名詞と類似性をもって、同じ語尾が与えられた。

名詞の性に応じての形容詞の語尾変化はすべての古代言語において生じるが、スミスはそれを、人間の耳に快適な音響の一定の類似性、押韻の一定の種類のために導入されたと考えている。

しかし、相関的な対象について具体的に考えられたある関係を示す前置詞の発明には形容詞の場合以上の抽象と一般化の努力が必要になる。まず、関係というものの自体が性質より形而上学的な対象である。また、関係を表し関係の他には何も表さない語を設定するには、その関係を関係する対象から抽象して考えねばならないから、かなりの抽象能力を必要とする。次に、前置詞は本性からして一般的な語で、どんな類似の関係を示すためにも等しく適用されねばならない。したがって、ある前置詞の発明には、その語を他のあらゆる関係とは別の関係の特定の種類を表現するものでなければならない。これには比較と一般化の非常な努力が求められる。

このような努力を避けるために、古代の諸言語は所有格、予格などさまざまな格を持ち、相関的な関係を表す名詞を語尾変化させたのである。このように、関係を相関的用語の1つの変化で表現すれば、その関係は、‘自然において見えるままに’相関の対象と混合混和されたものとして表現される。

スミスは述べておく価値があるとして、近代諸言語で古代の格の位置を占めている前置詞は、他のすべてのなかで最も一般的で抽象的で形而上学的であり、したがって、おそらく最後に発明されただろうと言う。

ところで、先に、スミスは言語の構造と自然界の構造に対応関係をみていると述べたが、自然界を構成する事 (出来事、事実) についてはどうだろうか。彼は動詞について以下のように論じている。

Verbs must necessarily have been coëval with the very first attempts towards the

formation of language. No affirmation can be expressed without the assistance of some verb. We never speak but in order to express our opinion that something either is or is not. But the word denoting this event, or this matter of fact, which is the subject of our affirmation, must always be a verb.

Impersonal verbs, which express in one word a complete event, which preserve in the expression that perfect simplicity and unity, which there always is in the object and in the idea, and which suppose no abstraction, or metaphysical deviation of the event into its several constituent members of subject and attribute, would, in all probability, be the species of verbs first invented.<sup>(7)</sup>

スミスは、名詞とともに動詞は言語形成の第1段階に属するとしているが、この動詞の発明の速さは彼に特徴的である。しかし、自然界を構成する物と事を対象にするのが名詞と動詞であると考えれば、これは論理的にうなずける。又、1語で出来事全体を表す無人称動詞が最初に発明されたとするのもうなずける。対象のなかや観念のなかにある完全な単純性と一体性をもっているからであり、何らの抽象も形而上学も必要としないからである。

では、無人称動詞はどのようにして人称動詞になったか。スミスの説明では、「くる」という非人称動詞があったとして、最初はライオンのような特定の対象がくることを指していたが、名詞の発展につれ何か恐ろしい対象がくるたびにその対象の名称を「くる」という語に結びつけ、やがて、名詞の助けなしには意味を確定できない人称動詞になったという。これは、名詞が固有名詞から普通名詞に一般化されていった過程に対応していると言える。

もともと無人称であった動詞が、出来事を形

而上学的要素に分割することによって人称動詞となった時、3人称単数で使われたであろう。しかし、1つの動詞によって表現される出来事なり事実は、話している人物にも話しかけられている人物にも断定されうるから、人称代名詞を発明する必要が生じる。しかし、これはきわめて形而上学的で抽象的な諸観念を表現する語であり、言語の最初の形成者がすぐに思いつくようなものではない。

したがって、彼らは、表現する出来事が1人称、2人称、3人称のどれについて断定するかに応じて、動詞の語尾を変化させたのである。これはラテン語をはじめ古代言語に普遍的な慣行である。この語尾変化は数、時制、法、態のすべてをつうじて繰り返され、動詞の活用を面倒複雑なものにした。精神の諸能力を極度に発揮する必要のある代名詞やさまざまな補助動詞の発明に先立って動詞の語尾変化がおこなわれたのは、形容詞や前置詞の発明に先立って名詞の語尾変化を多用したのと同じ精神作用であると、おそらくスミスは考えていた。

スミスは、古代諸言語の知識を十全に活用して、言語の発達（諸品詞の発明）と精神の諸能力の発達を以上のように考察していたが、それのみではない。歴史の発展をつうじておこるさまざまな国民の混合も言語の発達をもたらしたと言う。たとえば二つの国民が征服とか移民によって相互に混合されると、相手の国の言語の込み入った語尾の変化や諸活用に当惑する。そして自分達の格変化への無知を前置詞の使用によって補ったというわけである。こうして、格、性、数がなにであろうと、すべての語において1つの語尾変化になった。

類似した便宜手段によって、つまり、さまざまな補助動詞の発明によって動詞の語尾変化も単純、単一なものになっていった。存在動詞<sup>(8)</sup>は、なにか特定の事存在ではなく存在一般を示すので、あらゆる動詞のなかで最も抽象的で

形而上学的であり、発明は遅れる。しかしいったん発明されると、受動分詞と結合して受動態全体に取って代わり、活用のこの部分を単純、単一にした。所有動詞もあらゆる言語にいきわたっているが、きわめて抽象的で形而上学的であるため、発明は遅れる。しかし、受動分詞に適用され受動態の大きな部分に変わることができた。

このようにして、自然界の物の表示は、固有名詞の発明から普通名詞へ、名詞の語尾変化から名詞に前置詞、形容詞を添える形にと発展していく。事の表示は無人称動詞の発明から人称動詞へ、動詞の語尾変化から動詞に代名詞、補助動詞を添える形へと発展していった。その過程には、精神の一般化、比較、抽象化といった諸能力の発展があり、自然界を自然にあるがままに総合的に捕らえる姿勢から、形而上学的、分析的に捕らえる姿勢の発展があった。

ところで、「言語起源論」は、1761年『文献学論集』第1号において始めて活字化されたが、「修辞学・文学講義」(1762-3年)の第3講でも短縮したかたちで論じられていた。後に大幅に加筆され、『道徳感情論』の第3版に加えられることとなる。特に注目されるのが、人称名詞の‘I’に関するスミスの考察である。

The word *I*, for example, is a word of a very particular species. Whatever speaks may denote itself by this personal pronoun. The word *I*, therefore, is a general word capable of being predicated, as the logicians say, of an infinite variety of objects. It differs, however, from all other general words in this respect that the objects of which it may be predicated, do not form any particular species of objects distinguished from all others.  
……

It is far from being the name of a species, but, on the contrary, whenever it is made

use of, it always denotes a precise individual, the particular person who then speaks. It may be said to be, at once, both what the logicians call, a singular, and what they call, a common term; and to join in its signification the seemingly opposite qualities of the most precise individuality, and the most extensive generalization.<sup>(9)</sup>

‘I’ という語は無限に多様な対象を表示しえる一般的な語である。しかしその対象はそれ自身の特殊な性質によって他のすべての対象から分離される特定種類の対象を指すのではない。

‘人’のような1つの種の名称ではなく、逆に、使用される時はいつも、その時話している特定の個人を示している。つまり、はっきりした個性と最も広汎な一般性という反対の性質を持つ語なのだとスミスは言う。‘I’ は特定の個人をさすが何人もその特定の個人になりうる。このような語の特殊性は、その語が表示する対象の特殊性をも意味しているのではないだろうか。つまり、‘私’ は特定の個人を表示するが、同時に状況によって何人もも表示する。同様のことは ‘You’ にも当てはまる。特定の個人を表示するが、その時に話しかけられた何人もも表示する。とすれば、その人間のあいだには相互に交換可能なある等質性、平等性が想定されているのではないかと考えざるをえないのである。また、ここでは、言葉（指すもの）とそれが表示する対象（指されるもの）との対応関係は、名詞や動詞と同じではない。言葉が使用される状況を抜きにしては考えられないのである。

このように考えていくと、‘I’ や ‘You’ という言葉の特質は、「言語起源論」が添えられた『道徳感情論』における社会のなかの個人の存在のありようを示唆しているとも受け取られえ。そこで、次に『道徳感情論』その他について論をすすめることとする。

### 3. 『道徳感情論』および「いわゆる模倣芸術においておこなわれる模倣の本姓について」

『道徳感情論』は、社会の中でしか生きられない利己的な個人が、平和的な社会を構成するために各人に求められる行動の規範をさだめようとする試みである。スミスは人間が持つ利己心（自愛心）を前提として、社会の中で人間が平和的に共存するためには、公平な観察者の同感（sympathy）を得られる程度にまでその利己心を抑制する必要がある、つまり行為の適宜性がなければならないと説く。しかし、その公平な観察者も状況によって行為者となり、他の公平な観察者の同感が得られるように適宜に行動しなければならない。社会における個人は、時に行為者となり、時に観察者となり、相互に同感、適宜性の判断を繰り返す。その過程で自己を客観化し利己心を一定抑えて、社会的規範を作り出していくのである。そういった社会での個人のありようをスミスは以下のように述べている。

When he views himself in the light in which he is conscious that others will view him, he sees that to them he is but one of the multitude in no respect better than any other in it. If he would act so as that the impartial spectator may enter into the principles of his conduct, which is what of all things he has the greatest desire to do, he must, upon this, as upon all other occasions, humble the arrogance of his self-love, and bring it down to something which other men can go along with.<sup>(10)</sup>

ここに登場する人間は、自由で自立した個人であるが、特に他人に比べて優れているわけではない大衆の中の1人である。大衆たる人々は、お互いに同感を求めあい、かつ同感するのが可

能な、多分に等質的で平等な人間に思われる。だからこそ、行為者にも観察者にもなりえるのであり、個人の良心というものも結局は社会規範の内面化と言えるのである。

『道徳感情論』に登場する人間社会でのこの人間のありよう、つまり自立した個人でありかつ等質的で平等な社会人は、言語世界における‘I’とか‘You’のありかた、つまり、個性と一般性を併せ持つというありかたに通じていると感じられる。そしてスミスはそのことに気付いていたはずである。

又、『道徳感情論』では、‘I’、‘You’、とならんで、‘We’という言葉が頻出し、読者を本の世界に引き入れ、当事者意識を植え付けるのに功を奏している。たとえば同著は冒頭で、「人間（man）とは～」と一般論で始められているが、すぐに「私達が（we）～」という表現に切り換わる。これは、道徳とは社会の変化に従って変化していく相対的なものと考えていたスミスが、だからこそ読者に彼の説への同意をとりつけるためのレトリックではある。しかし、スミスが想定する近代市民社会では、市民が自由で自立してはいるが、多分に等質的で平等であり、だからこそ‘私達’という表現が可能であり、‘私達’という語で一括りできるとも思われるのである。

話は跳ぶようだが、スミスが折々に発表した論文のひとつに「いわゆる模倣芸術においておこなわれる模倣の本姓について」がある。その第1部はおもに絵画や彫刻を扱い、模倣したものと模倣された対象との不一致こそ芸術における快樂の源であり、模倣の美しさの基礎だと論じている。また、その快樂は、不一致の克服の努力に対する賞賛に基づいているとも付け加えている。この不一致克服の技術への賞賛のない鏡について、スミスは次のように述べている。

when the wonder is once fairly over, we choose, in all cases, rather to contemplate the

substance than to gaze at the shadow. One's own face becomes then the most agreeable object which a looking-glass can represent to us, and the only object which we do not soon grow weary with looking at; it is the only present object of which we can see only the shadow: whether handsome or ugly, whether old or young, it is the face of a friend always, of which the features correspond exactly with whatever sentiment, emotion, or passion we may happen at that moment to feel.<sup>(11)</sup>

鏡に映る自分自身の顔を飽きることなく見入るといふ行為は、自愛心の最たるものであろう。しかし、そこに映るのはあくまで、我々の映像 (shadow) にすぎない。我々は映像ではなく実物 (substance) を見ることの出来ない唯一の対象なのである。このスミスの示唆は重要である。スミスと同時代のサミュエル・ジョンソンの『英語辞典』(1755)によれば、'shadow'とは'実体の不完全でおぼろげな表出'である。鏡にうつる像を'shadow'とする表現法は古くからあるが、どうしても、プラトンのアイデアの世界の影、シェイクスピア劇に登場するリア王の影などが連想されてしまう。我々には、我々の本当の姿は見えていないのである。見ることは出来ないのである。だから、スミスは、我々は想像のなかで公平な観察者の中にはいりこみ、その観察者の目で我々の言動の適宜性を判断しなければならないと主張するのである。スミスは、鏡にうつる顔を友人の顔とも言っているが、友人とは最も身近な観察者である。友人とはお互いにお互いを映しあう鏡なのである。友人も我々とともに、自立した自由な個人であり、平等な社会人なのである。

#### 4. 『修辞学・文学講義』

若き日のスミスは、エディンバラでの公開講義で、また、グラスゴウ大学の論理学の講座で、同種の修辞学、文学講義をおこなっているが、ここに取り上げるのはスミスの講義の聴講生による筆写ノートである。ここでスミスは、近代社会での個人のコミュニケーションの道具としての言語を論じることになる。

スミスの修辞論が、伝統的形式的で煩瑣な修辞技術を排除し、「修辞は、それ自体の本質的価値を有するものではない」と断じ、新修辞学 (new rhetoric) と呼ばれていることは周知のことである。また、修辞論というより、扱う領域を拡げあらゆる種類の文体を論じたものであることも周知のことであるが、あえて、さわりの部分を引用する。

When the sentiment of the speaker is expressed in a neat, clear, plain and clever manner, and the passion or affection he is possessed of and intends, *by sympathy*, to communicate to his hearer, is plainly and cleverly hit off, then and then only the expression has all the force and beauty that language can give it. It matters not the least whether the figures of speech are introduced or not.<sup>(12)</sup>

ここで重要なことは第1に、言葉は、それが表示する物事との関係から一歩すすんで、言葉を使用する人間の思想・感情との関係という観点から捕らえられていることである。言葉は、物事に対してではなく、言葉を使用する人間の思想・感情に対して忠実であることが求められている。これは「文は人なり」という考えに通じ、文体論が書き手の性格論へと発展し、文学批評へと踏みこみ、英国の大学の教壇で同時代の英国作家が取り上げられた最も古い例の一つとなった。スミスは『修辞学・文学講義』の第7

講から第11講にかけて、文体の多様性を認め、文体とは、書き手のおかれた境遇・事情、著作の目的や意図に支配されると述べ、従って書き手の精神に適合するべきものだと確認している。デモステネスやロンギノスといった古典作家と並んで、英国の全作家中最も適正、正確、率直なスウィフト、単純型のテンブル卿、華やかだが謙虚なアディソン、大げさな莊重体のシャフツベリ卿などを論じている。

また第2に、文における語順（syntax）の問題である。これは18世紀当時の言語起源論では活発に議論されていたが、スミスは「言語起源論」のなかで言及しなかった。しかし、第4講で次のように述べている。文なり句は、概して3つの要素から成り立つ。何故なら、人間の頭脳は2つの概念を含み、我々はその2者の関係を表明するからである。3要素の1つが主語、中央に位置し2者の関係を断定するのが述語動詞、第3は目的語（補語）であり、この3要素はこの順序に配列されなければならない。その後適宜、程度や事情を示すものが配列され、接続詞や感嘆詞は文の目的に応じて位置が変る。多分これが最良の順序、つまり、話し手の心に自然に浮かび、彼の感じを最もよく表現する順序である。しかし、この語順では多様な表現に適さない。熱のこもった感動をこめた文章では、文中で最も関心を引く語を文頭におき、他の語もこの基準で配列されるべきだと言う。語順の問題でも、言葉が話し手（書き手）の思想・感情に忠実であることが求められている訳である。

第3に、書き手と同時に読者の共感性（sympathy）も重視されており、言語がコミュニケーションの道具である所以となっている。これは、ある対象の性質の表現法について、直接記述より間接記述に軍配を挙げていることに端的にあらわれている。たとえば、ある対象の性質を構成するする個々の部分を記述するよ

り、この性質が見る人々にあたえる効果を記述する方が、はるかに優れているとスミスは主張している。そしてこれが、スペンサーよりシェイクスピアがすぐれている理由となっている。また、歴史記述においても、事件の記述は、多くの場合間接記述が好ましいと主張する。また、より複雑な人物の性格描写について、直接的に性格を構成するさまざまな要素を述べるより、その性格ゆえに、その人物の外的行動や態度にあらわれる効果を述べる間接記述の方が、より興味をそそり、より完全に性格を伝えることができるとしている。読者に及ぼす効果の観点から優劣の評価をしているのである。まさにコミュニケーションを基礎にしている。

ところで、18世紀当時の言語起源論で活発に議論されたが、スミスは言及していない今1つの論点がある。言語のまさに起源としての、恐れや怒りの叫び声のような感情の言語の問題である。スミスは言語形成にかかわる感情的、心理的側面には無関心であり、この問題への直接の解答はない。しかし、彼が初期の歴史を語る時、また散文はビジネスの言語だと述べるとき、彼が人間の進歩、社会や文明の進歩を信じていたこと、また、それにつれて言語や文体も変化していったと考えていたことは想像にかたくない。

スミスは最初に現れた歴史家は詩人であり、神話的歴史や神々の冒険のような想像力を驚かせ衝撃を与えるような説話を記録したと述べる。驚愕すべきものごとが文明化していない人々の注意をひきつけるからであり、詩は驚愕と衝撃が自然に噴出する言語なのである。感情の言語と云っていい。次の時代の歴史家も、散文であっても、扱うテーマは詩的、つまり、半神半人その他妖怪など、粗野な状態の人類にみられる恐怖と迷信的な不安がうみだした想像の被造物だと言う。

詩という最も難しい形式と野蛮な最も文明の

遅れた民族との関連は、第23講で演示型弁論を扱ったさいにも異なる視点から論じられる。散文よりはるかに難しい詩が、なぜ常に散文より早く世に出たかをスミスは次のように説明している。つまり、最も野蛮で粗野な諸民族も1日の労働の終わりに娯楽と休息の時間を持ち、踊り飛び跳ねて楽しむ。その踊りに音楽が随伴し、音楽には詩（韻文）が随伴者になるということである。このように、詩はもっとも粗野で野蛮な諸民族によってはぐくまれ、かなりの完成度に達したのである。

しかし、彼らは散文の改良は企てなかった。それをもたらすのは商業の、あるいはそれに伴う富裕である。散文はビジネスの言語であり、日常生活のすべての事柄、約束がなされる文体であり、詩は快樂とてなしの言語のようなものである。富裕で安楽な人々が快樂の追求として散文を研究するようになって始めて、散文の改良が試みられることになる。社会や経済体制の変化が言語の変化をもたらすとスミスは考えている。彼は、言語の起源ではなく言語の歴史のなかに、感情の言語から理性の言語への変化をみていたのである。

\* \* \* \*

以上いささか牽強付会ながら、スミスの思想のなかに、人間の外界認識から、その認識の言語化とそれに伴う人間精神の諸能力の進歩、社会での伝達道具としての言語の役割などを検討し、通観を試みた。スミスはかなり明確に言語活動の歴史を見通していたと思われる。

## 注

- (1) 「外部感覚について」および「言語起源論」は、拙論「アダム・スミスの初期論文について」（『名城論叢』第1巻第4号、2001）で扱ったことがある。スミスとロック、スミスとルソー、コンディアックと

の異同などは、そちらを参照されたい。

- (2) Adam Smith, *Essays on Philosophical Subjects*, eds. W. P. G. Wightman, J. C. Bryce, and I. S. Ross. Clarendon Press: Oxford, 1980. p. 158.
- (3) 原題は 'Considerations concerning the first formation of Languages, and the different genius of original and compounded Languages' 通称に従い「言語起源論」とする。
- (4) 現代の文法用語では名詞に相当する。スミスは当然古い用語を使用しているが、拙論ではできるかぎり現代の用語を用いる。やむをえぬ場合は注をつける。
- (5) Adam Smith, *Lectures on Rhetoric and Belles Letters*, eds. J. S. Bryce and A. S. Skinner/Clarendon Press: Oxford, 1983. p. 203.
- (6) スミスは metaphysics, metaphysical という語をよく使うが、抽象的という程度の意味である。
- (7) *ibid.* p. 215.
- (8) 存在動詞とは be 動詞に相当、後述の受動分詞は過去分詞に相当、所有動詞とは have。
- (9) *ibid.* p. 219.
- (10) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, eds. D. D. Raphael and A. L. Macfie. Clarendon Press: Oxford, 1976. p. 83.
- (11) Smith, *The Philosophical Subjects*, p. 186.
- (12) *op. cit.* pp. 25-26.

## 参考文献

- Carey McIntosh, *The Evolution of English Prose 1700-1800*, Cambridge U. P., 1998
- Charles L. Griswold Jr., *Adam Smith and the Virtues of Enlightenment*, Cambridge U. P., 1999
- Jennifer Richards, *Rhetoric*, Routledge Taylor and Francis Group, London and New York, 2008
- Lorenzo Infantino, *Individualism in Modern Thought*, Routledge, London and New York, 1998
- The Scottish Invention of English Literature*, ed. Robert Crawford Cambridge U. P., 1998
- A. L. Macfie, *The Individual in Society*, George Allen and Unwin LTD. London, 2003
- R. H. Campbell and Skinner, *Adam Smith*, Croom Helm Ltd., London, 1982
- Stephen K. Land, *The Philosophy of Language in Bri-*

*tain*, AMS Press, New York, 1986

Stephen J. McKenna, *Adam Smith, the Rhetoric of Propriety*, State Univ. of New York Press, 2006

アダム・スミス『修辞学・文学講義』水田洋，松原慶  
子訳 名古屋大学出版会 2004

ジョージ・パークリー『視覚新論』下條信輔，植村恒  
一郎，一ノ瀬正樹訳 頸草書房 1990